

明清交替期の東アジア海域と華人海商：『華夷変態』を中心として

郭, 陽

<https://doi.org/10.15017/1485055>

出版情報：Kyushu University, 2014, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Fulltext available.



論文題目 明清交替期の東アジア海域と華人海商
— 『華夷変態』を中心として—

氏名 郭 陽

論文内容の要旨

本論文では、十六世紀末以来の東アジア地域変動の最終局面である、三藩の乱から清朝の台湾接收にいたる動乱、および日清貿易における転機となった貞享令に焦点を当て、その歴史過程を、東アジア海域を往来した華人海商の視点から、再検討することを試みる。

第一章では、まず本論文の基本資料たる『華夷変態』について、日本におけるその編集から流布・利用に至るまでの関係事項を、可能な限り包括的に概観した。そのうえで関連する先行研究を網羅的に整理し、現段階での研究の成果と課題を確認して、本論文で論じる諸問題の意義を提示する。

第二章では、中国語圏における『華夷変態』の研究史について、通史的に詳細な検討を加えた。台湾の学界では、台北帝国大学に所属する日本人研究者や、日本留学経験のある研究者によって、日本乞師・海上貿易・鄭氏政権・初期台湾史などの分野で優れた研究業績が蓄積されてきた。一方、中国大陸においては、近年、海外に残された中国関係史料（域外漢籍）により、新たな視点から中国史の再検討を試みる研究が活発化しており、唐船風説書を利用する研究も増加しつつある。ただし中国人研究者にとって、『華夷変態』の大部分を占める候文の読解は容易ではなく、従来の研究成果は、依然として同書所収の漢文史料を用いたものが多い。

第三章と第四章では、三藩の乱を機に大陸へと出兵した鄭氏勢力の動向に注目し、同じく反清陣営に属する福建の耿精忠・広東の尚可喜との内訌や、その後の清朝との対戦の経緯を、唐船風説書と漢文史料を照合して検討した。これらの考察を通じて、当時来日した海商の殆どが、実態よりも反清勢力に有利な情報を伝え、また鄭経と耿精忠の内訌や、鄭経の広東進軍、海澄をめぐる鄭氏勢力と清朝との攻防に関しては、鄭経・耿精忠・尚可喜と結びついた海商たちが、それぞれ自陣営の正当性や優位性を示し、またその指導部の失策については糊塗する情報を伝える傾向があることを明らかにした。このようなバイアスをともなう情報が流布していた背景には、三藩の乱の時期における、各軍事集団の情報戦の影響もあったと考えられる。

第五章では華人海商による情報収集のプロセスに注目し、その実態解明を試みた。三藩の乱の勃発後、割拠勢力が離散集合を繰り返し、沿海地帯の政治状況が激しく変動するなかで、華人海商の広範囲にわたる情報収集活動を可能にしたのは、海商自らの出身地や活動範囲の広域性や、各勢力

の内部で、さらには敵対勢力間でも活発に行われていた情報伝達の存在があった。一方で、華人海商たちがもたらす錯綜した情報に対し、長崎唐通事が、唐船風説書の情報精度を確保するために、さまざま方策を講じていたことも明らかにした。

第六章では、台湾鄭氏勢力が最終的に清朝に降伏するにいたる経緯を、主に台湾から来航した華人海商の報告によって検討した。台湾降伏を決定づけた澎湖海戦の直後も、台湾海商は依然として今後の戦況について希望的観測を示していたが、一方で台湾における秩序の混乱や民心の動揺については、漢文史料にはない臨場感ある状況を伝えている。本章での考察によって、漢文史料を利用した先行研究では論じられていない、鄭氏政権の最末期における台湾の軍事的・社会的状況について、新たな知見を示した。

第七章では、貞享令発布前後における華人海商の動向を対象として、清朝中央と地方の緊張関係、清朝海商と東南アジア海商の競合関係、貞享令と連動する清朝海関政策の調整、唐船運営の実態などについて包括的な分析を加え、江戸幕府と清朝との通商関係が構築される最初期の状況について再検討を行った。さらに定高仕法施行後の、長崎来航唐船数の増加傾向についても、唐船貿易を運営する海商たちが直面した現実的諸問題の考察を通じて、その原因を明らかにした。

最後に第8章では、明治期に漢文本『華夷変態』が留日中国人学生によって刊行された事実を再確認し、同書の構成と内容を、留学生による反清革命運動を背景として検討した。留日中国人学生は、通行本『華夷変態』にもとづき、その記事を清朝支配の排斥と、民族主義の鼓舞という目的に合致する形に再編集して、漢文本『華夷変態』を出版した。革命派内部では、革命の理念や方向性に関する路線対立も存在したが、特に鄭成功や南明政権による日本乞師についての記事は、民族主義的傾向の強い浙江派や湖南派のみならず、広東派の国際主義的な傾向にもアピールする側面をもっており、革命路線の相違を超えて、民族革命の宣伝材料として評価されたのである。

以上、本論文では、唐船風説書の記事を、漢文文献と併用して分析することにより、鄭経の大陸反攻から、清朝の台湾接收にいたる歴史過程を多角的に検討し、日清通商関係の成立過程についても、華人海商の視点を通じて考察を加えた。また、民族革命の唱導を目的とした、漢文本『華夷変態』が明治期の留日中国人学生によって刊行された経緯とその意義についても実証的に論究した。以上の検討を通じて、『華夷変態』に収録された華人海商たちの風説書が、彼らの貿易活動はもとより、明清交替期の政治・軍事状況、戦乱期における情報伝達や社会状況を伝える、他に類例のない重要な史料群であり、その一部が清末の革命運動にも利用されたことを解明することができた。